

開創20周年祝い法要

——もう少し頑張ろう——

黒田住職がお礼

横浜市港南区日野町の曹洞宗善光寺（黒田武志住職）で開創二十周年記念法要並びに式典が

五月二十四日午後二時から、大雄山最乗寺の余語翠巖山主を導師に迎えて挙行された。法要に先だって駒沢女子短期大学の東隆眞学監による記念講演が行なわれ、「釈迦殿」は檀信徒や有縁の僧俗で埋まつた。

当日は緑の風かおる好天に恵まれた。午後一時からの記念講演で東学監は、仏教精神に基づく女子教育にたずさわる者の立場から、女性、

とくに母親の偉大な教育の力などについて話した。

東学監は「父親は客観的・知的に子供を見るが、母親は主観的・情的に子供を見る。しかし、その母親がいなければ子供は育たない」と母親の無償の愛の尊さを例を挙げて説いた。

大本山永平寺六十七世の北野元峰禅師は貧しい農家に生まれ、幼くして寺にあずけられた。禅師の母は、「これからは仏さまの子供だから、辛くとも家へ帰つてはいけない。でも、おまえ

が悪いことをしたり、世間から相手にされなくなつた時はいつでも帰つておいで」と諭した。

北野禪師は約束を守り通し、やがてその高い徳を崇められる僧となつてから母の危篤の報に接しても、すぐには母のもとへは帰らなかつた。

臨終の枕元によく駆けつけた禪師は、母の耳もとにそれと告げると、瞬間、母は目を開き、「私は一日たりともおまえのことを忘れなかつた」と言つて目を閉じたという。「母親のこのひとことが子供を育てるのです」と東学監は語つた。

また、大本山總持寺を開いた太祖瑩山禪師の母は觀音祈願により、高齢で禪師を生んだ。のちに瑩山禪師は能登に總持寺を開き、山門建立を発願して、その中に觀音、地藏の放光菩薩二体を安置することを願つた。放光菩薩は安産の靈験あらたかな仏さまである。母の禪師に対する祈りが、山門にこめられている。しかし、実

際に山門が完成したのは禪師の没後八十三年目、二十七世石屋真梁禪師の代。やつとその偉容をあらわしたのである。いま大本山總持寺祖院の山門は、総ヶヤキの重層の樓門で、一人の尼僧が寄進勧募の中心だつた。明治三十一年に一山が全焼したので、これを再建するべく立ちあがつたのが、山崎心英という尼僧さんであつた。

その後、明治の末、總持寺は、横浜市鶴見の現在地に移転した。昭和四十四年、鉄筋コンクリート造りでは日本一の山門が現在の總持寺に完成した。日本一の山林王・木原豊次郎（法名・崇雲）氏の一寄進によるもので、木原氏は亡き妻の遺言と供養のためにこれを寄進したといふ。——東学監はこのように女性の力の偉大さを強調した。

引き続いて記念法要が余語大雄山主の導師により厳修され、教区・法類・法友寺院、善光寺

海外留学僧派遣育英会の役員、留学僧、檀信徒
ら多数が随喜参列した。

法要後、余語山主が垂示し、「本日、導師を勤めさせていただいたのは、本山で共に修行した御縁によるものと思う。その頃から忙しい人で、じつとしていなかつた。これは一生なおらないだろう。二十年といえば成人式だ。法を聴かせてもらう場所が出来るのは、死んだ人のお蔭であり、そういう場にお互いが相い違うことを喜ばなければいけない。仏さまにお花を捧げるのは仏さまの姿だ。そこに仏さまからめぐらしが現われている。道元禅師に、本来の面目と題する『春は花 夏はととぎす 秋は月 冬は雪』えてすずしかりけり』の有名な歌がある。お寺へ詣つたら、そういう姿を感得してください」とユーモアをまじえて話した。

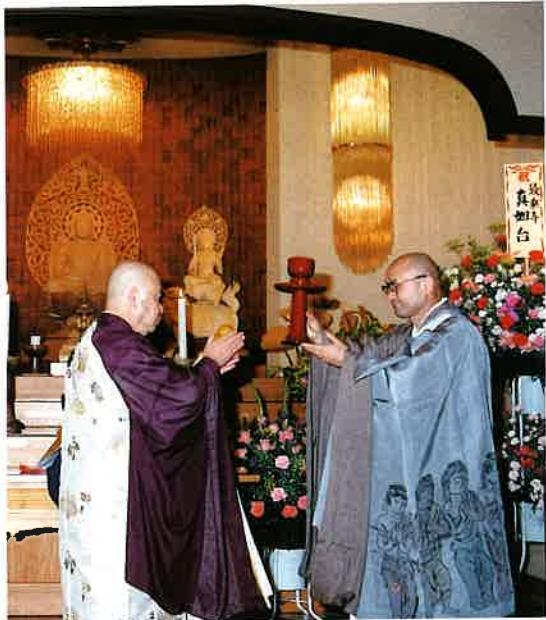
記念式典では、初めに開基家の村岡有尚氏が「人間でいえば成人というところだが、周囲の

寺が三百年、五百年の伝統に立っていることを思えば、一十年はほんの一瞬の経過でしかない。にも抱わらず今日すでに二千有余の檀信徒を擁し、また留学僧を海外に派遣するという、一宗を挙げても実行困難な大事業を独自で実施していることはまさに驚異というべきで、黒田方丈の卓抜な実践力には敬服のほかない。そして、黒田方丈が思う存分に腕を振るうことが出来るよう協力を惜しまない檀信徒の皆様に心から感謝する」と祝辞を述べた。

この後、本寺の栃木県大田原市・光真寺住職黒田俊雄師、檀徒総代の伊藤喜三郎氏が祝意を込めて謝辞を述べ、最後に黒田住職が「一つの節目を迎えて、さあもう少し頑張ろうと思つてゐる」とお礼の言葉を述べて、なごやかな祝宴に移つた。

(中外日報より転載)

善光寺開創20周年 記念法要



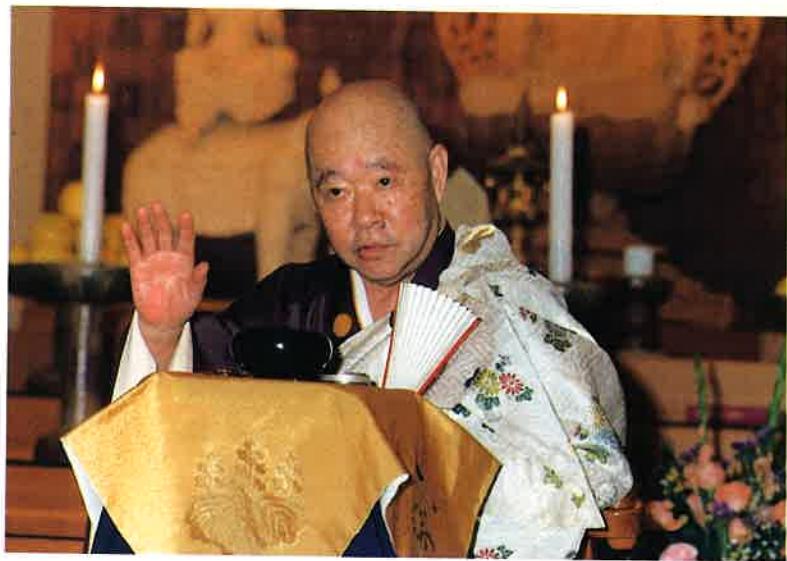
上・香り高いお茶が供えられる
左・釈迦殿を埋めた檀信徒の方々



上・大雄山最乗寺余語翠巖老師を大導師
として記念法要が営まれた
右・お礼を述べる黒田住職夫妻



法要後、垂示される余語老師



本寺光真寺住職黒田俊雄師と母堂



龍光寺・佐藤俊明師

記念講演が東隆眞駒沢女子短期大学学監によって
行われた



檀徒を代表して謝辞を述べる開基家



これからが正念場

開創二十周年記念の事業及び行事、初中後何の魔障もなく、首尾よく無事に成ったしました。これひとえに檀信徒の皆様の絶大なる協賛の賜物で、厚く厚く御礼申し上げます。私はこの感謝の念に包まれて、過ぎ来し方を振り返りております。

幼少の頃、由親の膝に抱かれて、「お、お、あつたわ……」はじまる昔話に胸をときめかした思い出がじなたもお持のかのうといあります。十年一冊どころか、おかるから、お、お、となり、二十年。二十年ともなれば世の中は想像できなくほどく変わるものだ、お、お、おじある昔話は異次元の世界の出来事のように興味深く耳にひくのです。

十年前、アメフカから無一物で帰つてしまはかりの私は、すでに手に渡つてゐる小庵を譲り受け、宗教法人「善光寺」の設立に着手しましたことは前にも書きましたが、その翌年の二月、存

知なじねかじはとても想像でやなこいとおつましや。善光寺は
いまよりやく昔話のやもぬ寺に成長しました。

そしてその間、一十年の歩みは、檀信徒の皆様方の理解ある御協
力により、さいわいにして大過のないものとなつたといつよりは、
いわさかなりとも世に貢献できるものであつたことを自負し、無上
の喜びとし、感謝して居るものであります。

開創一十年を迎えた今年はまた、比叡山延暦寺の山田天台座主の
讐歎に接する光栄に浴し、やうには立正校成会の庭野日敬会長先生
と親しく対談する機会を得るなど、善光寺はこのよき世の法田を受
けるようになりました。

善光寺は一十年、そして私は齢五十、天命を知る年齢に達しました。
天命を知るとは、天から与えられた使命を知ることであり、人
事を尽して天命を待つの心境に達するのが五十歳といつことです
から、これからがいよいよ天命の重きを深く深く心に刻み、やうに
一段の精進を誓つものであつま。何卒倍田の御支援をお願い致し
ます。

合掌